

【寄稿】 翻刻者雑感

森山, 英明
元奥田知事秘書

<https://doi.org/10.15017/7172109>

出版情報：奥田八二日記研究会会報. 12, pp.296-297, 2024-03-31. 奥田八二日記研究会(九州大学大学
文書館内)
バージョン：
権利関係：

【寄稿】

翻刻者雑感

森山 英明

私はこの翻刻作業は2回目だ。前回は83年知事就任直後からの随想日記を担当した。今回は3年連用日記で退任の前年末（1994年）までだ。2、3気づいたことを書いてみたい。

第一はやたらと誤字・脱字が目についたことだ。先生は書をよくし、文字については現役時代決裁文書の誤字・脱字をよく指摘された。1996年以降もアクロスで一緒になるが、この時は日記を書くにも辞書を手放せないとおぼしておられた。加齢のためだったのだろう。

第二は書に関しては「宿題として」の揮毫を楽しまれた？ようだ。随所に揮毫が出てくる。色紙、条幅の半截、1/2はこともなげに書かれている。しかし看板、碑文、絹本などの注文には苦吟されている様子がわかる。一度書作に立ち会ったことがあるが、注文の条幅は気に入らぬとその時は7回も書き直しておられた。条幅の和紙は2枚預かっていたが、書き損じが多いと注文を受けてきたものとしては恐縮しっぱなしである。看板は書き損じると鉋をかけなおさねばならない。

第三に1994年は74歳である。激職の中であっても便所、玄関の雑巾かけ（10月2日）したり柿枝や藤棚の蔓を脚立に上って切ってみたり、枝切り鋏は自分で研磨している。こまごました家事にも怠りがない。

そして、第4に気づいたことは、この忙しい身なのにマージャンは頻繁に楽しんでいる。92、93、94年の平均はおよそ月に3回はマージャンだ。その際呼びこまれた人の名も丁寧に書いてある。書かれていないのはただ2人だけだ。奥田本人と、あとの1人はみゆき夫人、家庭マージャンを楽しんでおられた。もちろん家庭外でするマージャンもあるが、そこにも丁寧に対戦メンバーは残してある。奥田家の麻雀は子供たちも幼いころから加わっていたらしい。長男の一彦氏によると昔から下手の横好きで、自分の手作りを楽しむばかりで、上がり損ねたのに「こんないい手だったのに」悔し紛れに公開していたという。根っからの勝負師は決して手の打ちは明かさないと評していた。

3期目最後の前年である94年元旦に西日本新聞に4期目不出馬のスクープ記事が出る。日記によると記者にそれらしい話はしたが、記者が都合のよいようにアレンジしてそれらしい記事に仕立て上げたのだと書いている。筆者はインタビューを終えてやや興奮気味の記者に廊下であった折に不出馬のこと聞いた。すぐに知事に面会を求め、発言の事実と関係者と相談の上かと問うた。ややあいまいではあったが事実らしかった。さらに「まわりに相

談をして決めることではない」ときっぱり。「特に権力の周辺の人々は維持することによるメリットがあり、引き留めにかかるはずで、そうなると辞めるに辞められなくなる」と聞いた。別の機会にきいた言葉は「権力は長くなれば必ず腐敗する。潮時もある」だった。今どきの自民党に聴かせたい。

ある意味計算しつくされた発言だったのかもしれない。

奥田日記 12 年を見ると知事になりたくてなったものではなく、辞めたくて辞めたのでもないという見方もあるが、1982 年候補者選びも、退任劇もどうやら奥田八二氏の自作自演だったような気もするのである。